

氏名	カス 春	ガ 日	アキラ 聡
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第310号		
学位授与年月日	平成23年3月25日		
学位論文等題目	〈作品〉スカラ＝ニスカラ Sekala Niskala 〈論文〉陶酔のテクノロジー—バリ島における音と陶酔の共鳴—祭祀儀礼を中心とした民族誌の視座から—		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部） 伊藤 俊 治
（論文第1副査）	〃	准教授	（ 〃 ） 鈴木 理 策
（作品第1副査）	〃	〃	（ 〃 ） 古川 聖
（副査）	人間科学総合大学	教授	植 島 啓 司

（論文内容の要旨）

本論の中心的関心は、バリの人びとの内面から発し、大気を振るわせているものや、大気の中に表れて消える響きを、人びとはどのように聴いているのだろうか、そして、部外者である私たちはどのように聴き取ることができるだろうか、ということ考察するため、バリのサウンドスケープを詳細に捉え、民族誌を作ることである。

本論では、たとえばガムランのCDなど録音制作物においては消される運命にあるか、雰囲気演出として添え物程度に扱われてしまうような背景の音にも、積極的に耳を傾けていく。また、聴取における主役と脇役というような障壁をとりはらい、さまざまな音を拾い上げる。そのような作業を通し、バリ特有のサウンドスケープの描出を試みる。この姿勢と手法は、本研究における作品《スカラ＝ニスカラ Sekala Niskala》でも同様である。

私たちのいう芸術とはその一面において、作者の心の動きという第三者が感知出来ない不可視のものを現実の時空に表す術のことである。バリの人びとにとって、不可視の存在自体や、不可視と可視の関係性は、芸術という分野の中のみならず、すべての局面において、もっとも尊重されている。彼らは可視の存在をスカラ、不可視の存在をニスカラと呼ぶ。それらはバリの人びと特有のテクノロジーにより、さまざまな姿として現出されるのである。

本論での民族誌記述の元となる調査データは、私が1992年から2008年までのあいだ断続的に行ったフィールドワークに依拠する。本研究はさしあたり地域を限定せずに、さまざまな種類のトランスダンスと祭祀儀礼の採訪調査を行い、それらの分布や比較の可能性を探るものとしてはじめた。それ以外にも、さまざまなヒンドゥー祝祭日における祭祀儀礼や人生通過儀礼にも参加し、観察を行った。

第1章では、まずバリについての概説を行う。東南アジアにおけるバリの地理的・文化的な位置関係の把握、現在のバリをとりまく状況や専門的な用語を、本論に関係する範囲で基本的な知識として共有する。次に、二項対立を旨とするバリ特有の宇宙観にもとづいた方位・空間・身体といった諸相が人びとにどのように解釈されているのか、音の表徴から考察する。そこでは、喧噪と静寂という2極のはざままで円環するサウンドスケープ、音に込められた愛着・郷愁、声から透徹する世界、身の回りにいる動物たちの声とその受容などに耳を傾けている。次に、音と金属との関係性を、シャーマニズムと鍛冶師との接点から考察する。そこでの青銅製楽器への考察を通し、銅鐸や銅鼓の響きから直観される古代日本とバリに通底する響きへのイメージーションについて述べる。

第2章では、トランス（憑依による陶酔状態）と音の相関を種々の祭祀儀礼における事例を通して考察する。バリの祭祀儀礼は、神事と芸能が相即不離に結合したものであり、バリの事象の中で、超自然力がなまなましく、共時的に、そしてもっとも明確に示現したのものである。その諸相としてのチャロナラン劇やサンギャン儀礼の観察を中心に、祭祀儀礼の時空について述べる。そこでは、古来からのアニミズム的要素を保持する非教条主義的な宗教形態であるシャーマニズムが、バリ独自の形として発展し、陶酔のテクノロジーに高められ、自然界・人間界で起きるさまざまな事態の中で臨機応変に柔軟性を発揮してきた姿を看取できる。さらにバリの宇宙観が、祭祀儀礼以外の場面においてどのように反映し実体化しているのかを考察する。それらの作業を通し、バリの人びとが劇的に変容するあらゆる状況へと対応するために依拠しているものとしての音の存在について、明らかにする。

第3章では、これまでの議論をふまえ、音響による民族誌と芸術の可能性について述べる。バリのサウンドスケープには多様な音源が認められ、多焦点な音響が特徴である。そこで本研究では、映像とは違って「フレーム」をもたない音響メディアの特性を生かし、日常に広がる音響全般に関心を向け、捉えてゆくことによって、映像人類学や民族誌映像的な観点によるものだけではない想像力の喚起や視座を示す。また、映像と音響のメディアの相違、音響による実験的な民族誌の実践、それを通して行う作品表現のありかたや表現への志向を、自己の経験から述べる。

本研究を通して明らかにするのは、バリ特有のサウンドスケープの実体や音と陶酔の共鳴が共同体の均衡を保つ鍵を握っているという事実である。また、バリの人びとが振動という音響現象そのものに認めている超越的な存在は、静寂から騒音までの中で円環運動をする汎アジア的なノイズの論理構造と陶酔のテクノロジーによって裏付けられる。

バリとは、人びとによって培われてきた陶酔のテクノロジーと場所のポテンシャルが相互に絶え間なく共鳴し、環流し、円環構造を形成している場なのである。

（博士論文審査結果の要旨）

春日聡の論文「陶酔のテクノロジー」は、インドネシア・バリ島における宇宙観を「音」の考察を通じて論考したものである。この土地の地理的・文化的背景を整理した上で、祭祀儀礼や日常生活の中で音のありようについての考察を進めているが、1992年から2008年までの間に断続的に行われた取材に基づく具体例は、実地での見聞きという経験性に裏打ちされた明晰さがある。バリの人びとにとっての音声を「内面から発し、大気を振るわせているもの」と定義した上で、かれらがそれをどの様に聞いているかという問いをたて、善悪を混然一体と捉える独特の二項対立的宇宙観と引き合わせることで答えを導く。それは異質なものと溶け合う「音」の本質的特性に触れる考察であり、論の展開も緻密である。以上の理由から学位授与に値すると考え合格とする。

（作品審査結果の要旨）

春日は論文に示されたような独自の視点から、バリ島において長期にわたるフィールドワークを行い、その調査の中からこの作品の核になるイメージをすくいあげた。この作品は資料としての記録映像ではないが、もう一つの意味で記録映像ともいえる。

春日はバリ島の人々の生活の根底にある、「地」「水」、「火」、「風」「空」という五つの基本的な概念を中心に置き、彼独自の方法でフィールドワークからの収集資料をもとに、五つの章に分けて記録映像を再構成している。ここで大切なのは彼が論文ににおいて主張したように、単なる映像や音の羅列ではなく、音や映像を使った（バリ島の）一つのリアルティの再構成が同時に記録となるような、微妙なバランスの中で視覚的聴覚的構成表現を行なうことであった。「地」の章において、彼が論文の核におく鍛

冶＝火＝金属音のイメージが土の記憶の中から立ち現れ、「水」の章では水にまつわる儀式から祭りへ、そしてそこへ加わる金属音へと収束していく。「火」の章ではガムラン（金属音）によってバリ島の神話的世界と現在が重ね合わされ、それが再び鍛冶の金属音のリズムへと変容する。「風」の章においてバリ島の自然、昼の世界が「火」の章の夜の世界に対比的に表現され、風はついには人間の呼吸（ホラ貝）となる。最終の「空」の章において、鈴（金属）の響きが少女たちの踊りに憑依し、それらのイメージは鳥へと変容し空へ、自然へ、世界へと溶解する。

連句形式ともいえる音と映像のイメージの連結とフィールドワークの記録映像の形式を融合させた映像手法は独自のものであり、巧妙に構成され、関係づけられた音とイメージが喚起する世界の表現力は卓越したものである。

以上の理由から、本作品は学位授与に値すると認め、合格とする。

（総合審査結果の要旨）

今回の論文は、インドネシアのバリ島のサンギャンと呼ばれる陶酔儀礼を中心に、バリ島特有のサウンドスケープの実態を探る研究となっている。申請者は10年以上の渡ってこの特殊なフィールドを映像人類学、音楽人類学、美学、芸術学の観点から調査しており、論考自体も16万字あまりにのぼる長大なものになっている。バリ島の宗教や文化をたどって歴史的な背景を検証しつつ、映像と音響によるエートス（民族精神）の抽出がどのようにして可能になるのかを問う内容となっている。また作品も「可視・不可視」をテーマに自己の体験や調査したことを身体化して表現しようとするもので、アーカイバル・アートとして興味深い。以上の観点から審査委員会のメンバーによる協議の結果、合格とする。